
我が家のカミサマ

昇龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

我が家のカミサマ

【Nコード】

N1511F

【作者名】

昇龍

【あらすじ】

この物語は放課後の教室で野球をしていた4人がひょんなことからある人に出会うお話です

プロローグ

プロローグ

彼はどこにでもいる中学生です。

成績は中の下、運動能力は下の下、

でも友達がたくさんいる、そんな普通の中学生でした。

いつもと変わらない放課後に残っている4人。

「阿門 力」

「橋刃 翔」

「西山 由香里」

「畑中 敬二」

この4人が彼「かみの神野 せいじ清次」の平凡な人生を変えたのです

第一章

カミサマ

「野球しようぜ!!」

一人が言いました。彼は「阿門^{あもんりき} 力」

通称「リキ」体系は小太りで卓球部に所属しているが幽霊部員。僕はやる気はなかったが皆「やる」

と言うのでしぶしぶやる事になってしまった。

「グラウンド行くか」と僕が言くと、野球部の「橋刃^{はしはしやう} 翔」が学校への持ち出し禁止のはずのワックスで髪をまとめながら

「ここでやるに決まってるだろ?」と言った。

こことはもちろん教室だ。

すると横から引っ込み思案の「畑中^{はたなか} 敬二^{けいじ}」君が

「あの・・・でも・・・ガラスとか危ないし・・・」

そう、それにこの学校は珍しく黒板の50センチほど上に神棚が置いてあるのだ

僕は心の中で

(よし!よく言った!!このまま諦めてくれ!)

スポーツが苦手な僕はもちろん野球も出来ないので敬二君に賛同した。

しかしそこで男勝りの女の子「西山^{にしやま} 由香里^{ゆかり}」が

「大丈夫だって!早くやろうよ、私一番バッターね」

と有無を言わせない言動で野球をすることが決定した。

(由香里の奴・・・余計なこと言うなよ・・・)

僕は無駄な事だと知っていたが心の中で泣いた。

結局野球は教室で始まってしまった。

3回や4回までは何の問題もなかったのだが5回の裏、事件が起きた。

由香里が教室内であるのを忘れてバットをフルスイングしたのだ。もちろんボールはものすごい速度で空中を飛んだ、そしてその先には神棚があった。

しかしボールと神棚の間に守備範囲を広くするために教卓の上に立っていた僕の顔があった。

ミシッ

ボールは僕の左顔面に直撃した

「ごめん！大・丈・夫・じゃないね」由香里は謝ったが謝ったようには見えなかった

僕は速攻で保健室に行ったが保健室にいた先生は、

「シップ貼って包帯巻いとけば大丈夫じゃない？」と明らかにやる気のない声で言った。

でも他にどうすればいいか解らなかったたので結局先生の言ったとおりにしておいた

包帯を巻き終わると顔の左半分が隠れて左側が見えなくなってしまった

すると翔が

「半分ミイラの半ミイラ」と言い出した。

すると力や由香里、敬二までもが笑い出してしまった。

そのまま僕は左半分が見えないまま皆と一緒に帰路に着いた

「いやー、ごめんね痛かった？」由香里はおどけた声で言った

「痛くないように見えるかい？」僕は冷たい目で由香里に言った
すると敬二が

「だから危ないって言ったのに・・・」と微笑みながら言う。

「まあ、大した怪我じゃなくて良かったじゃんか」

と翔が仲裁に入りケンカになるのはなんとか回避できた

「でも左側見えないのって危ないじゃない？」と力が言う
すると由香里が

「車に轢かれるかもよ？一緒に家まで行ってあげようか？」と笑いながら言った

しかし僕は

「いいよ、轢かれるわけないだろ？それにお前家反対方向じゃん」と言っただけで由香里は

「そう・・・」と残念そうに言った

「エ！？お前もしかして・・・」と力が言おうとしたが

由香里のハイキックが喉に直撃ししゃべれなくなってしまった

「ごめーん、当たっちゃった」

言うまでも無くわざとだ。

「じゃあ俺こっちだから」

「僕も・・・」翔と敬二が別れて家に帰っていった
すると力も

「俺はこっちだから」と言い二人とは違う道で帰った

「私も帰るけど本当に大丈夫？」と由香里が心配そうに言ったが

「大丈夫だよ、また明日、バイバイ」と言って僕は自転車に乗って
いってしまった

すると由香里は何も言わずに帰って行った。

僕は自転車に乗りながら少しだけ「大丈夫」と言っただけを後悔していた。

（やつぱり付いてきてもらえば良かったなあ）と思いながら道を進んでいた

そのとき、今は死角になっている左側から車が来た。

（なっ！居眠り運転か！？ヤバイ！！）

僕は何とかかわそうとした、しかし車はかわせないほど近くに來ていた

（そんな・・・！死にたくない！）

僕は今になって由香里の言うことを聞いておけばよかったと思った
僕は車に轢かれてしまった・・・ハズだったが、

次の瞬間車は電柱に突っ込み、僕はついさっきいたはずの位置から三メートルほど

離れた位置にいた。

「何で……？」僕は驚かずにはいられなかった

何で僕は移動した？それだけが頭の中を駆け巡っていた。

すると横から

「大丈夫でしたか？」と少年のような声が聞こえた

僕はその声の方向を向くと

純白の羽が生え、純白の衣に身を包み、頭の上に黄色く輝く輪をつけている

妙な姿かたちの少年が浮いていた

「お前、だれ……？」僕は唐突に聞いた

「僕はカミサマです」少年は元気よく応えた

「カミサマ……？」僕は何が何だかわからなかったが

唯一、この少年が僕を助けてくれたと言う事だけはわかっていた

第二章

カミサマの恩返し

「大丈夫ですか？怪我ありません？」

只者とは思えない少年、自称「カミサマ」は僕の体を気遣うように言った。

「ん？・・・ああ大丈夫」僕は戸惑いながら答えた

「そうですか、良かったです」とにっこりして言った。

「そんな事より君は・・・一体何なんだ？」僕は少年に訊いた
すると少年は

「人が集まってきましたね」と言っ
て事故現場を見た
すると僕は少し急いだ様子で

「早く教えてくれ！君は一体何なんだ？」と言った。

しかし少年は落ち着いた声で

「騒がしいので場所を変えましょうか」と言いながら
指をパチンと鳴らすと、周りの空間が歪ゆがんだ。

僕は驚いて

「え？え？ギャアアアア」と叫んでしまった

すると次の瞬間歪んだ空間は元に戻り周りの景色が変わっていた。

「？君今何したの？」僕は言った

すると少年は当たり前のように

テレポーション

「瞬間移動ですけど？」と答えた

そして少年は続けざまにこう言った

「そう言えばさっきの質問に答えてませんでしたね」

僕はハッとして

「そうだよ！君は何なんだ？」と言った

少年は自己紹介を始めた

「さっきも言いましたけど僕はカミサマです」

僕は

「僕が聞きたいのはその後だよ」と言った少年は

「僕はあなたに助けてもらった恩返しに来たんです」と微笑みながら言う

僕は不思議でたまらないような顔で少年に言った

「僕別に君を助けてなんてないんだけど」

すると少年は

「顔面でボールを止めてくれたじゃないですか」と言った

「って事は君・・神棚の中に居た本物の神様!？」

と僕は驚きながら少年に訊いた

「はい」少年は普通に答えた

「名前は？」僕はいつまでも「君」と呼ぶわけにはいけないので一応名前を訊いておくことにした

「僕の名前は聖^{ひたり}ウォードレスです。ウォーと呼んで下さい」ウォードレスは元気に答えた

「何でそんな名前なの？」

「母が日本神で父が米国神なんです」ウォードレスは答えた
(アメリカにも神っているんだ・・・)

僕は心の中でそう思った

「そう・・・でも今日のところはもう帰ってくれない？」

今日は色々ありすぎて疲れたのでウォーにそう言った
するとウォーは

「何言ってるんですか！僕は恩を返すまで帰りませんよ？」と眼を輝かせていった
しかし僕は

「でもそれだと皆に見られるじゃないか」
と一番危惧しなければならぬことを言った
するとウォーは

「大丈夫です。僕の姿が見えるのはあの時教室に居た人だけです」

と自信満々に言った

「つて事はこれからずっと付いてくるの？」

と僕は苦笑いしながら言った

「ハイ!!」ウォーは笑って答えた

（そんな・・・これからもこんな事があるのか・・・僕は普通に生活したいのになあ）

僕はため息をつきながら泣いた

同時刻・・・某国の山中

「こいつが今回の標的だ」
ターゲット

謎の男はモニターに映っているウォーを見ながら言った
すると横から

「こいつが・・・聖ウォードレス・・・」と言う声が聞こえてきた
声の主の姿はウォーと正反対、そうまるで悪魔のような姿だった

第三章

7人の悪魔

ウォーがやって来た次の日の朝、僕の心は不安でいっぱいだった。
(またこれからも色んな事件があるのか・考えただけで疲れる)
僕は悲しげに思った。だがこれから学校なので
いつまでもくよくよしているわけにはいかなかった

「これから学校ですか？お供いたします」

いつの間にか横にいたウォーが言った

「行って来ます」

僕は寝ぼけてちゃぶ台の上に寝ている兄に言った
すると兄は虚ろな眼で

「ん？ああ・・・あ、今日晩飯作つて」と言った

しかし僕は晩飯を作るなどまっぴらごめんなので

「自分で作れば？」と言って家を出ようとしたが

その瞬間に兄は

「ほう・・・なら作つていようか？何がいい？焼きそばか？チャ
ーハンか？」

と言った、しかし僕はその時はっとした。

僕は兄の作る料理を知っているのだ、あれは人の食べる物ではない
人参は皮を切らないし、肉は中まで火が通っていないのだ

「いや、やっぱり僕が作つとくよ」僕は青ざめた顔で言った

「よろしく」兄は笑いながら言った。

「はあ、朝から嫌な気分」僕は通学路で自転車に乗りながら言った
するとどこからか

「オーイ」と4人分の声が聞こえてきた。

その声の主はあの4人だった

「あれ？誰その子？」由香里が言った

「話すと長くなるんだけどさ……」

僕は昨日ウォーに助けてもらった事、この5人だけがウォーを視られること

昨日の出来事を全て話した。

全てを話し終えた時僕は何だか恥ずかしくなってきた

（何か今僕……すごい馬鹿らしくない？）信じてくれないだろう
と思った。

しかし僕が思った返事とは全く違う返事が返ってきた

「スゲーーッ！！！」皆がほぼ同時に言った

「え？」僕は思わず口にしてしまった

すると翔が

「え？じゃねえーよ、すごいじゃん！神様と友達になれるなんてさ
！！」

と興奮しながら言った、しかし興奮しすぎて鼻血が出てきてしまった

「へえー、ウォーって言うんだー、これからヨロシクね」

由香里はにっこりして言った。

だがその横から力が

「騙だまされるなウォー！！それは営業スマイ……」

営業スマイル、力がそう言いかけた時、横から小声で

「西山鬼道にしやまきどう虐殺流奥技」と聞こえてきた。

その直後、力の体は回転しながら宙を舞い地面に落ちた

由香里の家はメチャクチャ強い武術家なのだ。

ほのぼのしたいいつもの感じここにウォーが入っても何も変わらない

僕はそう思ったかった、そうあって欲しかった……

その日の放課後……帰り道

「なあ、ウォー」僕はウォーに質問した

「何ですか？」

「お前みたいな神様って他にも居るのか？」

別に知りたくは無かったのだが一応聞いてみた

「居ますよ？他に6人」ウォーはいつの間にか持っていたリンゴを齧りながら答えた

「6人もいるのか・・・」僕は少し疲れた声で言った

「ええ、そして僕たち神の対極の立場に存在するものも7人です」ウォーは真剣な顔で言った

「対極の立場・・・？」僕は静かに訊いた

「ええ、僕たち7人の神の他に7人の悪魔が存在するのです」

ウォーは顔をしかめながら言いそして続けた

「悲愴・憤怒・嫉妬・強欲・怠惰・傲慢・快樂の7人です」

その話を聞いたとき、僕は自分の人生が変わる気がした・・・

第四章

憑き物

ウォーが7人の悪魔の話をした数分後、僕は家の前に墜落した
「もうちょつと普通にできないのか・・・？」

ウォー話をした直後に「急用ができました」と言っ
僕を家の前に瞬間移動させたのだ

「ただいまー」僕が家の中に入ると

「遅いッッッ！！」そう言っ
兄が攻撃を仕掛けてきた

「何時だと思っ
とんじゃコルアアア！！」その眼には殺意がこもっ
ていた

「6時だよッ！！」僕はそう返事して兄の攻撃をかわしたが
それでも兄は

「俺を餓死させる気かッ！」兄は当たればおそらく骨折は免れない
であろうほどの

パンチを容赦なく僕に向けてきた

（ヤバイな・・・空腹で我を忘れてる、こんな時はこれしかない！）

僕はそう思い^{カバン}鞆から帰り際に買っ
ておいた豚肉を取り出し

「今日は焼肉だよー」そう兄の耳元でささやくと兄の動きが止まった

「邪魔だから夕食まで寝とい
てくんない？」

僕はそう言っ
て兄の頭に花瓶を叩きつけた

「さあてパソコンでもいじ
って時間つぶそうかな？」

そういっ
て僕はパソコンの電源を入れ、インターネットにつないだ。
すると下に今日のニュースがいくつ
か出ていた

いつもならこんなものは無視して
ゲームをするところだが、
今日はなぜかニュースが眼にとま
った

「何だ・・・？これ」僕がその
ニュースを見ていると

「只今戻りました」とウォーの声が聞こえてきた
「なあ、ちょっとこれ見てくれないか？」僕はパソコンの画面を見つめながらウォーを呼んだ

「何ですか？」ウォーはパソコンの画面を見つめた
そのニュースの内容はアメリカで何の前触れも無く
道路が砕け、ビルが大破したというニュースだった
「これ、お前が言ってた7人の悪魔と何か関係あるんじゃないのか？」

僕はウォーに聞いた。するとウォーは
「まさか・・・もうこんな近くに・・・！？」

ウォーは少し震えていた
「近くって・・・アメリカと日本こゝだぞ？むしろ遠い？」

僕はそう思ったがウォーは、

「この世界は大きく「天界」「地獄界」「人間界」に分けられていて、それぞれの世界は

たとえ時速10000キロで100000時間移動してもたどり着かないぐらい離れているのです」

「え・・・？マジで・・・！？」

僕はようやく事の重大さを理解した

「奴らは皆、私達7人の神が憑みないた者の命を狙っています」

「何のために・・・？」僕はウォーに即座に訊いた

「私達が憑いた物には神の種類に応じて特殊な「スキル」が与えられるのです」

ウォーは特殊な能力「スキル」について話し始めた

「それって・・・僕にも・・・？」僕は恐る恐る訊いてみると

「ハイ、あります」予想道理の答えが返ってきた

「でも何でそのスキルを持つてる人を狙うわけ？」

この問いにウォーはすぐ答えた

「悪魔はスキルを持った人の心臓を喰うとそのスキルを得ることができるのです」

その話を聞くと僕はすぐに

（もしかして・・・命狙われてる？）と思った

ほぼ同時刻・北海道から100キロほど離れた海上

「ククク・・・やっぱ物壊すって楽しすぎる、半端じゃねーよ」

男は笑いながら海の上を歩いている

その男の腕は血にまみれて真紅に染まっていた

そしてその横には悪魔がいた

「さあ、もうすぐ日本だ。今度の奴は壊し甲斐がいのある奴だといいなあ」

悪魔は不敵に笑った

第五章

快樂を求める者

声が聞こえてきた

「もつと・・・もつとだあ・・・」

低く、しかし子供のような声が

「雑魚ばかりじゃ全然足りねえ・・・」

闇の中に子供が浮いている

ただの子供ではない

黒い角を尖^{とが}らせ、

黒い羽を生やし、

赤い鎖を体中に巻いている

悪魔のような子供

「次はお前の番だあ、覚悟しとけよお？」

子供はそう言い残し、闇の中に消えた

「・・・・・・・・」

午前7時、ウォーは悪夢で目覚めた。僕はまだ寝ている

「来るなら来い・・・・・・・・やってやる・・・・・・・・！」

ウォーは汗をグッシヨリとかいていた

その日の授業中に僕はウォーの異変を感じ取っていた。

基本的にウォーは授業中はニコニコしながら横で静かにしているのだが

今日は違った、真剣な顔で拳^{こぶし}を握り落ち着きが無かった
そしてその日の昼休み、皆で話しをしていると

「今日はウォー何かあった？」由香里もウォーの異変に気づいたらしく

ウォーに話しかけた、

しかしウォーはその問いに答える余裕も無かったようだ

明らかにおかしい、いつもなら「何でもありませんよ」とか答えるはずなのに

ウォーが人の言うことを無視することなど絶対にはずなのだ
この時、この場に居た全員がウォーの異変に気づいた

そして6時間目が終了した

すると横からいつもの様に力が

「一緒にかえろうぜ」といつてきた

しかし僕は

「ゴメン、今日は買出しに行かなきゃいけないんだ」
と言って断ってしまった

「なあんだ、つまんねえ」翔が心底暗い顔で言った

「ゴメンな」僕はそう言って学校を後にした

「ゲーセンでも行かない？」

敬二はそういったが、由香里が

「何言ってるの？尾行するわよ」と犯罪ギリギリなことを言い出した

「はあ？めんどくさいから俺パス・・・」

力はそう言ったが由香里に全力で股間を蹴られたため黙らされてしまった

しかし敬二が

「でもそれ犯罪・・・」と言おうとしたが

由香里に睨みつけられたため黙り込んでしまった

「んじゃ、行くか！」唯一無事な翔が号令をかけて出発した

・・・と思いきや

いきなり由香里が屈みこみ、何かを拾った

「キレイ・・・」それはペンダントだった

落し物にもかかわらず即座にそれを首にかけた

それほど由香里にはこのペンダントがきれいに見えたのだろう

「行かねーの？」

「今行くよ」由香里は力を引きずりながら走り出した

「・・・・・・・・・・」

僕は黙り込んでしまっていた。

いつもならウォーが話しかけるので黙り込むことは

あまり無かったので、この沈黙は重く感じられた

「なあ、ウォ・・・・・・・・」

話しかけようとした時

ゴゴォォン

100メートル程先のほうで何かが崩れる音がした

「何だ・・・・？」

僕は胸騒ぎがしてその音の原因を確認しに行こうとした

しかしその瞬間、目の前に男が立っていた

男はニヤリと笑ったかと思うと

「み〜つけたあ」と言いその姿を変えた

「させるかっ!!」つい先刻まで腑抜けていたウォーが

眼に生気を灯し男の顔を全力で殴りつけた

男は吹き飛び、倒れて動かなくなる・・・

そうなるはずがそうではなかった

男の体は悪魔へと変わっておりウォーのパンチを受けても少しよろ

めいただけだった

「なっ・・・・・・・・え？」

僕は状況が全く理解できなかった

「自己紹介が遅れたなあ、俺は快樂の悪魔「ウィール・マグネ」だよろし・・・」

「黙れええ!!」

快樂の悪魔マグネは余裕の表情で自己紹介をしたが

ウォーの蹴りがそれを止めた

「オイオイ、久しぶりに会ったってのに素っ気ねえなあ」

しかしマグネは笑いながらウォーの腕を掴み、握った
ただそれだけだった、そのハズなのに

「ボキッ」鈍い音が響き渡った

「ぐっ・・・」ウォーのダイヤモンドよりも硬い骨はおかしな方向
に折れ曲っていた

「ここに来るまでさあ、雑魚ばっかでつまんなかったんだよねえ」

マグネは笑ってウォーを殴りつけた

「清次さん・・・逃げっ・・・」ウォーが言い終わらない中に

マグネの蹴りがウォーの腹に命中した

その瞬間ウォーの体は吹き飛び、50メートル程先にある木に直撃
した

「グッ・・・ああ」ウォーはすでに瀕死と言っているほどのダメー
ジを受けていた

（このままじゃ・・・ヤバイ!!）

僕はそう直感した、そしてほぼ同時に命の危険を感じた

「お前・・・この200年間何してた？前はもつと強かったのにな
あ」

マグネはそう言いながら拳を握った

「弱い奴に興味ねーよ、死ね」

マグネがトドメをさそうとした次の瞬間

「うらっ!!」由香里がマイ木刀でマグネの小脳の辺りを全力で殴
った

「がっ・・・」マグネは少しよろめいただけだったが

翔はその隙を見逃さなかった

「食らえっ!!」翔は全力でマグネの顎の先端を右から左に殴った

「ガキがっ・・・こんなもん効く・・・か・・・!？」

マグネは膝について体制を崩した。

「小脳と顎の先を殴って運動神経を麻痺させた・・・？」

僕はこのチャンスを無駄にするわけにはいかないと

ウォーを担いで逃げ出した

「って言うか、何で皆ここに？」

僕は走りながら皆に訊いた

「ウォーが元気なかったからその理由を探しに来たんだよ！」

力は必死の形相で走りながら答えた

「僕は・・・アイツに怯えてたんです」ウォーは重症を追いながらも喋ることができた

「アイツってあのマグネとか言う奴の事？」由香里マイ木刀を収納しながら質問した

「ええ、アイツは・・・っ！！」ウォーがマグネについて語ろうとした瞬間
ズガアァン！！

目の前の地面が砕け、そこにはマグネが立っていた

「逃がすわけ無いだろお？」

マグネが拳を振り上げ全員がもうだめだと思った

ゴッ！！

「・・・・・・・・・・？」

何が起ったのか解らなかった

誰も怪我はしていない、唯一違ったのは目の前に女の人が居ることだった

「ミズル・・・！？」

ウォーとマグネだけが名前を知っていた

「何してんの？随分ずいぶんとピンチじゃんか」

僕はようやく気づいた、

その人の背中に羽が生えている事に

「二人目の・・・神」

僕がそう言うのと女の神はニコツと笑った

第六章

神器 じんぎ

「ミズネ」そう呼ばれた女神の登場により、場は完全に硬直してしまった

そしてその沈黙を破ったのはマグネだった

「何しに来たあ」その顔は笑っていなかった

「決まってんでしょ？ 友達を助けに来たのよ」

ミズネはニコニコと笑って答えた

「どいてろ、お前に興味ねんだよお」

マグネはミズネを無視してウォーの方に歩いていったが

次の瞬間マグネの視界は180°回転した

「どけと言われてどくほど私は素直じゃないのよ」

ミズネの表情が一瞬にして鬼のようになった

そしてミズネの右手に見えない何かが集まり始めた

「ミズネッ！ やめっ・・・！」

ウォーとマグネはその何かが何かわかっていた

「ちっ・・・」

マグネはそれを見て焦りはじめていた。それだけその何かは恐ろしいと言ふことだ

「塵ちりになれ・・・」ミズネがそう呟いた瞬間

ガガッ！！

「!?!」

マグネがついさっきまで立っていた地面が抉えぐれていた

そしてミズネの右手には、先が三叉になっている槍が握にぎられていた

「相変わらずの威力だなあ・・・グングニル」

マグネはその攻撃の中心にいたため

服はボロボロになり、骨も何本か折れているようで

立っているのもやっとと言う状態だった

「グングニル・・・？」

僕はその名前に聞き覚えがあった

確か北欧の神話に登場する伝説の武器だ

「一発じゃ倒れないか、やっぱ100年も闘^やってないと鈍るね」

先ほどとは打って変わってミズネの顔はにこやかになっていた

「これで消えろよ・・・！！」

ミズネがグングニルを廻し始めると、マグネの周りの地面に亀裂が走った

「ちっ・・・使うか」

確かに聞こえた「使うか」とまさかマグネもグングニルのような武器を使うのか

そしてその武器とグングニルとの戦闘に周りの物は耐えられるのか

「ちよっ・・・ウォー、これってやば・・・」

ウォーにそう言おうとしたがウォーも同じ事を考えていたようだ

「あの二人を止めて！！このままやればこの世界は滅びてしまう！！」

ウォーは全力で叫んだが無駄だった

素手の人間が武器を持った神を止められるはずが無い

「掻^かき消せ！！ヤ・・・」

マグネは最後までその言葉を言うことができなかった

目の前にいきなりフードをかぶった何者かが現れたからだだった

しかし誰なのかは解らない、人間でないのは確かだ

そしてマグネの方を見てみると明らかに顔色が悪くなっていた

「誰だか知らないけど！そのボケと一緒に消えなっ！！」

ミズネは誰なのか確認もせずにグングニルを投げつけた

そしてグングニルは謎の人物に直撃、二人は消え去ってしまった

そうなるはずがそうではなかった
グングニルは謎の人物の目の前で止まってしまった

「V e r s c h w i n d e n S i e」

謎の人物はそう呟いた、次の瞬間グングニルは消えてしまった
「な・・・・・・・・・・？」

この場に居た全員が何だか解らなかった
いきなりの謎の人物の登場
謎の言語

グングニルの消滅

「悪・・・魔・・・神・・・」

ウォーがそう呟いた

すると謎の人物はフードを取り顔を見せた

その顔はおよそ悪魔には見えない爽やかな顔だった

漆黒の角

白銀の髪

そして真紅のコートに身を包んだその男は口を開いた

「この度はうちの部下が失礼しました」

今度こそ全員の思考が停止した

この男は何を言っているのか？

「部下にはきつく言っておきますのでどうか今回は見逃してくださいませんか？」

本当にこの男は悪魔なのか、そう疑ってしまうほど丁寧な口調だった

「って言うか！！グングニル返して欲しいんですけど」

ミズネは極力強気で言った

「グングニル？ああ、さっきの神器のことですね」

「K o m m e n S i e h e r a u s」

男がまた謎の言葉を発すると空中にグングニルが現れた

「G e h e n」その言葉でグングニルはミズネの前まで移動した

「これでよろしいですか？ではこれにて失礼いたします」

男はにっこりと微笑み、軽く会釈えしやくをした

「では、I c h k o m m e z u r & a m p ; u m l ; c k」

次の瞬間男は消えていた

あの男は何をしたのか

自分達は助かったのか？

そう思うと腰がぬけてその場に座り込んでしまった

「助かったあ！！」

僕は精一杯の声をだして今のこの瞬間を喜んだ

十分後・悪魔神の城

「ウィール・マグネよ、お前は自分が何をしたかわかっているか？」

その一言は薄暗い部屋の中で発せられた

「・・・はい」マグネは小さい声で答えた

「ならお前は自ら進んで罰を受けるか？」

「・・・はい」マグネの沈黙の時間はさっきよりも少し

だけ長かった

そしてその答えをきいて悪魔神は

「解った、ウィール・マグネを10日間の独房入りとする」

そしてマグネは独房に入った

周りは真っ暗で何も見えない、そんな中でマグネは

「せいぜい調子に乗ってろ、お前がそこから堕ちるのはすぐだぞ」

マグネは声を上げて笑った
その笑い声は薄暗い悪魔界に染み込んでいった

第六章（後書き）

読者の皆様へ

今回は更新が遅くなってすみませんでした

パソコンが壊れたり

本が降ってきたりと色々と大変なことがありました
どうかこれからも

「我が家のカミサマ」をよろしくお願いします

第七章

出会い

目が覚めると僕は布団の中にいた

「そうか・・・終わったんだっけ」

思い出すだけで頭が痛くなる昨日の出来事

ウォーは重症のため一度天界に帰ってしまった

「・・・・・・・・・・今何時だろ・・・・・・・・」

今日は平日なので学校に行かなければならない、一応皆勤賞を狙っているのだ

とりあえず僕は時間を確認しようと布団から出ようとした
その瞬間、部屋のドアが蹴り破られた

「清次、飯まだ？もう8時だぞ？」

兄が腹を鳴らしながら言った、

「嘘！！急がなきゃ！」

僕は急いで制服に着替え、^{かばん}鞆を担いで家を出た

「行って来ます！」

「飯」後ろから兄の声が聞こえたが、^{かま}構っている暇はなかった
学校までの道のりは約10分何とか間に合いそうだ

そしてチャイム5秒前・・・4・・・3・・・2・・・1

「セーフ！！」何とか間に合った、まだ朝なのにもうクタクタだ
しかしもう少し頑張って教室まで行かなければ

そして教室にやっとの思いで着くと、

いつもどおり由香里達が走ってきた

「おはよう！遅かったな」翔が元気に言った

「朝寝坊しちゃってさ」僕は苦笑いするしか無かった

しかし皆は昨日のことをどう思っているのだろう、最悪トラウマになっっているかも知れない

「大丈夫だよ、皆にはちゃんと説明しといたから」
聞きなれない声、でも聞いたことがある声だった
そしてその声の方向に振り向くと

「ミズネ・・・さん？」

ミズネがさも当たり前であるかのような顔で立っていた

「何でここに！？」

僕は周りに聞こえないほどの声で訊いた

「私も憑いちゃったからだよ、由香里ちゃんにね」

「由香里に！？」

心底驚いた、つい1週間まえまではただの中学生だったのに
今はその二人が神憑きになっている、夢なのか疑ってしまいそうだ
「実はさあ、拾ったこのネックレスにミズネが憑いてたらしいんだよね」

由香里は首にぶら下がっているネックレスを強調しながら言った
それ以前に今の会話が聞こえていたのか、恐ろしい聴力だ

キーン コーン カーン コーン

「グヘッ！！」

力がいきなり水平に吹き飛んだ

「チャイムが鳴ったら席につけて言ってんだろぅが」

「先生、初耳です」

僕はいつものことなので軽くツツコンで流した

「えー、いきなりですが転校生を紹介しまーす」

本当にいきなりすぎる、この人はいつもこうだ

体育祭の日程は一週間前に知らせるし

社会見学は皆当日になってやっと知った

それはさておき、転校生が来ると言うのは

何だかドキドキするものだ、一体どんな人なのか

翔はもうすでに女だと思い込んでいるようで鼻の下が伸びきっているかすかにその後ろで口笛を吹きながら木刀を構えている由香里が見えた

「入って〜」

先生が虚ろな目で転校生を呼ぶと静かにドアが開き始めた

「皆さん始めまして、北屋^{きたや} 華乃^{かの}です」

転校生は女だった

身長は少し低めで147センチほどだった（後に訊くと当たっていた）

冬であるにも関わらず小麦色の肌をしているのは生まれつきだろう顔も悪くはない、上の下というところだ

翔にいたっては鼻血を噴いていたが、原因は木刀のようだった

「趣味はピアノ、好物は茄子^{ナス}のはさみ揚げです」

につこりとした顔で自己紹介を終えると北屋はあいている席に座った

「授業はじめるぞ〜」

また憂鬱^{ゆううつ}な授業が始まる

その瞬間、視界の端にこつちを向いて微かに笑っている北屋が見えた気がした

「ハ〜イこれで今日は終わり！皆気をつけて帰るんだぞ〜」
やっと終わった、僕は帰ろうとして荷物をまとめたが

トントン

後ろから誰かに肩を叩かれた、振り向くとそこには部活の顧問が居た
「清次、部活だぞ！！」

部活！完璧に忘れていた、何とかして今日は休みたいところなのだが
「早くしろ！キャプテンだろ！！」

有無を言わせてくれなかった

ちなみに言い忘れていたが僕はバドミントン部キャプテンなのだ

「だるゝ」

体育館に着くと北屋が居た

「あれ？何で居んの」

「あ、えゝつと神野君だっけ？私もここに入部したの」

北屋は僕の名前を確認しつつ言った

「ふーん、そうなんだ。宜しくね北屋サン」

僕は深く聞かなかった、何か面倒ごとがありそうな予感がしたのだ

「華乃って呼んでください、他人行儀は嫌いなんです」

北屋は細かいことにかかってきた

別にYESと言っても良かったが

「嫌だ^や」そう言いたい気分だった

「どうすれば言ってくれますか？」

変な所で突っかかってくる奴だ、別に呼び方なんてどうでもいいのに

「僕と試合して勝ったら呼んでやってもいいかな」

明らかに冗談だった、周りの誰から見ても

だが北屋は本気だった

「解りました、コート張ります」

マジか！！こいつは馬鹿なのではと思ってしまった

そして5分後とうとう試合が始まるうとしていた

しかもコートの周りにはギャラリーがウヨウヨいる

なぜか横断幕まで掲^かげてあった

「転校生VSバドミントン部男子キャプテン！！勝利の栄光はどちらの手に！！」

と書かれていた、一体誰が作ったのか

バドミントンでは試合を始める際にこう言う

ラブオールプレイ

この言葉を主審が言えば試合が始まる

と云うかなぜこんな大事になったのか、僕は激しく後悔していた

「ラブオールプレイ」

主審の声が聞こえた

その瞬間北屋の呼び名を賭けた試合が始まった

(ここまで大げさにしないでいいと思うんだけどなあ)

そして20分後

21対19

僅差きんさで負けてしまった

「これで……はあ、華乃って呼んでくれますよね？」

華乃は息を切らしながらコートに向こう側で言った

「解ったよ……華……乃」

何だか少し恥ずかしかった

「これで今日の部活は終了、バイバーイ」

いち早く女子キャプテンが帰った、それに続いて皆も帰路に着き始めた

(はあ、帰ろ、疲れたあ)

僕はフラフラになって自転車にまたがった

気がつくとも横には華乃が立っていた

「あの、少しお話したいことがありますね」

嫌になってしまおう、疲れきったこの瞬間に相談

断ってしまおうかと思ったが、それも悪いので話だけでも聞くことにした

「何？」

「実はですね……」

華乃が指をクルリと一回転させると

「今晚は、ご機嫌いかがですか？」

いきなり背後から声が聞こえた

(この声……！まさか！！！)

振り向くとそこには昨日の記憶にある

悪魔神の姿があった

第七章（後書き）

どうも

期末テストが一週間後に迫ってきていますが

勉強に飽きたので更新しました

勉強できる人とできない人の差はここなのでしようね

第八章

クリエイター
創造者

「な・・・・・・・・・・!？」

なんということだ

昨日の悪夢のような出来事が蘇よみがえってくる

しかもこの男は、あの騒ぎを一瞬で止めた程の力の持ち主だ
もっと言えば隣にウォーはいない、

(・・・・・・・・・・死ぬかも)

どうすればいいのか、どうすれば助かるのか

まず闘うという選択肢は無い、負けるのは目に見えている

逃げるしかない、それでも工夫しなければつかまってしまう

そう思ったが、僕はあることに気づいた

(こいつの服・・・ボロボロだな・・・)

よく見ると服が所々破れており

左手は焼け焦げている、火傷のレベルではない

完全に焼けているのだ

「気づきましたか？」

悪魔神は疲れているような顔だった

この男がこんなになるなど、何かあったとしか考えられない

「自己紹介がまだでしたね、私の名はアポロディア・ハデスです」

ハデスは左手の痛みを無視して言った

「何か・・・あったのか？」

僕は静かに訊いた

「反逆だよ」

ハデスの口調が変わった

その目には憎しみがこもっている

「反逆・・・？」

相変わらず話についていけない

反逆？そんなの悪魔内での話しに人をまきこまないで欲しい

「そしてこれは全世界を巻き込んだ反逆だ」

ハデスの目の色が変わった

先ほどもまでは黒かった目が、鮮血に染まった

「お前・・・誰だ・・・！？」

人間でも解るほどの重圧だ
プレッシャー

明らかにさっきまでのハデスではない

「俺はアポロディア・ハデン、この体の二人目だ」

二人目、確かにそう聞こえた

このハデスという悪魔は二重人格者らしい

さすが悪魔と言わねばさうか、まともなのがない

「ハデスの野郎がチマチマしてっから出てきてやったんだよ」

どうやらハデンの方はハデスと比べて気性が荒いようだ

「アイツはいつもこうだ、チマチマチマ敬語ばかり使いやがって」

なにやらハデンが愚痴り始めた

なんだか長くなりそうなので

「反逆の話続けてくんない？」

とりあえず止めた

「ああ、そうだったなどこまで言ったっけ？」

「全世界を巻き込むって所まで」

何か疲れる

でも友達と話してるみたいでちょっとだけ楽しかった

「要するに、反逆者のメンバーは10人」

10人？確か悪魔はハデス（ハデン）も含めて7人のはずだ

「数が合っていないんだけど？」

その質問にもハデンは冷静に答えた

「まだ解んねえ？メンバーの中には神側のやつもいるんだよ」
僕は何が何だか解らなくなった

「正確には悪魔5人、神5人だ」

味方が5人敵に寝返っている

そんな状況があっているのか

「奴らは自分達のことを創造者^{クリエイター}って名乗ってる」

創造の神と名乗ってはいるが

奴らが齎^{もたら}すのは破壊だけだ

皆解っているはずなのに

「お前はその創造者^{クリエイター}に入ってるのか？」

上から声がした

懐かしい声

23時間と46分ぶりの声だ

「ウォー!!!」

空からウォーが降ってきた

まだ離れて一日もたっていないのに

何年も会っていない気がした

「お久しぶりです、お体に異常ありませんか？」

いつものウォーだ

何も変わっていない

「話の続きだ、お前は味方か？」

ウォーは真剣な顔で言った

しかしそれでもハデンは動じなかった

「どっちだと思う？」

ハデンは悪魔独特の不気味な笑いを顔に浮かべていた

「もしお前が敵なら、今ここで消す」

ウォーはハデンを睨み付けている

今にも闘い始めそうだ

「味方じゃなかったらこんな話しねえよ」

ハデンは乾いた土の上に座り込んだ

「お前の伝えたいことはそれだけか？」

ウォーはハデンの話に続きがあるかのように言った

そしてそのそれは的中した

「創造者^{クリエイター}は、今のこの世界を壊して新しい世界を創るつもりだ」

この世界の破滅

新しい世界の創造

今の僕には何が何だか解らない

そう思って考えている内に頭痛がしてきた

そこから先はよく覚えていない

僕はいつの間にかベッドで寝ていた

そして美しく透き通るような歌声が聞こえてきた

「It was possible to come here .
thanks to you . . .」

「意味わかんねーよ」

僕は笑いながら歌の主を見つめた

そいつはいつも傍に居てくれた

そいつはいつも笑っていた

そいつはいつも僕を心配してくれた

「ありがとう、由香里」

その声で由香里はにっこりと笑った

第九章

新世界

僕がベッドで寝ていた間

由香里は全てを聞いたらしい

クリエイター
創造者

世界の再生

僕が聞いたことは全て知っていた

それでも逃げ出さない、現実から目を背けない

時々、由香里は本当に女かと疑ってしまう

ちなみに歌ってたのは気分だそうで

そして三日後

ハデス、ミズネ、ウォー、由香里、華乃

皆は僕の家が集まった

「今日皆さんに集まって頂いたのは他でもありません」

ハデスはみんなの前で言った

クリエイター
「創造者の事ね？」

ミズネは本を読みながらハデスに言った

「ええ、そのとおりです」

ハデスはいつの間にか

机にティーセットを置いており

コップに紅茶を注いでいた

「真面目な話じゃねえの？」

唯一真剣に聞いていたウォーが言った

「おっと、失礼」

「ハイハイ」

二人は真剣に話を始めた

「創造者は今から三日以内に世界を動き始めます」

一瞬ここに居た全員の表情が変わった

「そんな！じゃあ三日で全員倒せて事！？」

「そんなの無茶よ！」

「そうですよ！！」

僕と由香里と華乃は立ち上がって猛反論した

しかし他の全員は何も言わなかった

「大丈夫よ、もしこの世界が変えられてもチャンスはあるわ」

ミズネは笑った

「そう、たとえば悪魔と神10人がかりでも世界を一つ消すなんて出来ません」

ハデスはそう言って僕らを宥めた

ならどうやってこの世界を壊すというのか

「創造者はこの世界を封印して新しい世界を創るんだよ」

ハデスの目の色が

漆黒の黒から

深紅の赤に変わり始めた

どうやらハデンが出てくるようだ

それに気付いた華乃はため息をついた

ハデンが出てくると話がややこしくなるからだろう

「要するに創造者全員で封印術をかけてこの世界を封印するんだよ」

それを聞いてとりあえず僕達は安心した

でも油断はできない

三日以内にこの世界は変革を遂げる

封印されても、されなくても・・・

「とにかく！3日以内に創造者は全員集合する、そこを叩けば・・・」

」

ハデンの勢いのいい声が止まった

そして周りに何か気配を感じたのか、あたりを見回し始めた

「どうかしたの？ハデス」

華乃が立ち上がってあたりを見回そうとした

しかしミズネがそれを止めた

「立っちゃだめよ、敵がいる」

あまりにも唐突とうとつだった

ここにいた人間は驚いたが

神と悪魔はすでに気付いていたようで

落ち着いていた

「今から奴らを探そう」

そういつてウォーは地図を取り出し、半分に切り分けた

「僕は北半球、ハデンは南半球、ミズネは最後の一人を探してくだ

さい」

そういえば最後の一人がいるのを忘れていた

顔は知らない

声も聞いたことがない

でも今はとても力になってくれる気がする

・・・多分

「俺が大声をだしたら全員出発だ」

ハデンは立ち上がり、窓の外を見ながら言った

「それじゃあ、短い旅の幸運を願おうか」

ミズネも立ち上がり気合を入れた

「三日で創造者クリエイターをぶっ殺すぞ！！」

ハデンがそう言った瞬間、この世界の行く末をかけた
旅が始まった

ハデンの掛け声から

2日と10時間後

ハデン十華乃

「いねええー！ー！ー！ー！ー！」

ハデンはアマゾン川から西に10km程の位置で叫んだ

【だからここより別のところに行こうと言ったでしょう？】

ハデンの脳内でハデスとの会話が行われている

「ウルサイ！！ダメレ！！」

ハデンは疲れ気味の表情で歩いている

しかしその後ろにいる華乃はすでにフラフラだった

ここ最近水もろくに飲んでいないのだ

それと言うのもあの急な旅の始まりのせいだ

「死ぬうー！！！」

「どこだぁー！ー！ー！ー！！」

アマゾンに二つの声が響き渡った

同時刻

ミズネ十由香里

「ねえ、お腹すかない？」

ミズネは後ろから由香里に問いかけた

「そんな事より、最後の一人を探すのが先!」

由香里は気合の入った声でミズネに言った

「でもでも」

「でもじゃな・・・」

ぐう

情けない音が聞こえた

ミズネがやけにニヤニヤしている

「まあ、お腹がすくのは生物として当然なわけで・・・」

由香里は頬を赤くしながら言った

「何か食べよう!」

「イエエー!」

二人は食料を探し始めた

同時刻 ウォー十僕

ここは地球最北端の地、北極点

死ぬほど寒い

「超寒い!! 死ぬって!!」

僕は震えながら、ウォーの後ろをついて行った

「大丈夫ですよ、死ぬ程じゃありません」

「お前らとは体のつくりが違・・・?」

遠くに何か見える

7・・・8・・・いや10

ウォーも気付いたようだ

「あれは・・・!!」

ここから300m先

クリエイター
創造者がいる

第十章（前書き）

今回から

皆のプロフィールを載せたいと思います

記念すべき第一号はこの方！！

名前…聖・ウオードレス

身長…168センチメートル

体重…54キログラム

趣味…読書・自分探しの旅

好きなもの…笑顔・友達

嫌いなもの…コーヒ―・飴

第十章

先制攻撃

「・・・だ・・・ち・・・って・・・!!」

クリエイター
創造者達の話し声が聞こえる

しかし吹雪にかき消されてかなり聞き取りづらい

断片的にしか聞こえてこないがどうやら言い争っているようだ
(言い争ってるって事は、リーダーに統率力がないんだな)

ウォーはそう判断すると即座に場所を移動した

クリエイター
そして創造者のいる所の全体を確認できる位置に行った

「おい、まず皆に連絡だぞ」

僕はウォーに後ろから言った

「ああ、そうでした」

こんな時のためにハデンがこの世界に来る際に

「何か役に立つかも」と言う理由で

緊急連絡用の小型通信機をアメリカの軍事基地から

こっそり拝借してきらしい

もちろん返す気は無いようだ

そしてウォーは通信機を取り出し

ハデス達と連絡を取ろうとしたが

ザーツザザ・・・ザザーザザ

嫌な音が流れるだけだった

まるでテレビの砂嵐のような音だ
ウォーは空を見上げると

ハデス達との連絡を完全に諦めた

（空に何かあるのか？）

僕はウォーと同じように空を見上げた

するとそこには、南極や北極ではよく発生するが
北極点と南極点ではあまり観測されないはずの

オーロラが輝いていた

オーロラは磁場を持っている

そのために通信ができなかったのだ

「チツ・・・」

ウォーは軽く舌打ちすると

ミシッ

通信機が粉々になって

北極の冷え切った氷の上に落ちた

（壊す意味はあったのか？）

「うわぁ、通信機がコナゴナになってしまったぁ」

「そんな棒読みしなくていいから、どうすんの？」

ウォーはコナゴナになっている通信機の

破片を横に払いのけて立ち上がった

「先制攻撃あるのみ！」

ウォーは右手を体の前に差し出し

左手で右手首を掴んだ

「今一度我に力を」

その瞬間ウォーの右手が光り輝き

三つの神器が表れた

あめのむらくものつるぎ
天叢雲劍

やたのかがみ
八咫鏡

やさかにのまがたま
八咫瓊勾玉

日本人なら誰もが知っている三種の神器
その三つが目の前にある
歴史マニアなら感動して倒れるだろう

やたのかがみ
そして八咫鏡は左手の甲に
やさかにのまがたま

あめのむらくものつるぎ
八咫瓊勾玉は右手の甲に

あめのむらくものつるぎ
天叢雲劍はウオーの手に握られた

あめのむらくものつるぎ
「天叢雲劍の能力はいたって単純」

そういつてウオーは現在の位置から離れ

小さな氷山の裏に回った

クリエイター

ちょうどウオーと創造者の間に氷山を挟みこむ位置だ

「その能力は・・・」

あめのむらくものつるぎ
そしてウオーは天叢雲劍を横に振った

「一刀両断」

次の瞬間

氷山は横一直線に切れ、
クリエイター
創造者に向けて崩れ始めた

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1511f/>

我が家のカミサマ

2011年1月1日14時08分発行